



## 「Australasia Regional Endurance Championship(AREC)」参戦記(最終回)

オーストラリア・クイーンズランド州で開催されている Endurafesta2024 に行ってきました。  
Australasia Regional Endurance Championship(AREC)、参戦の最終回をお届けします。

最初のループを順調に終えた日本チーム、次のループもグループ走行する事になりました。  
馬も人もいい状態で進んできた事、ここで油断があってはならない、など、  
監督とホースコーディネーターで打ち合わせた結果です。  
選手達も理解を示し、順番に並んでSTARTしていきます。



そして第2ループ、順調にすすんできたチームから「1頭の歩様がおかしいかもしれない」と連絡が入ります。  
ゴールまであと少し、第1ループ同様にゴールすると、全員がコールされ検量です。  
そしてこのループで1頭が歩様異常で失権してしまい、日本チームは3頭となってしまいます。

第3ループでは、グループを引っ張ってきた単騎でも問題のない1頭をグループから離脱させました。  
結果としては、個人では3頭が完走、チームでも成績を残す事ができました。



さて、時間が経って結果だけを見れば「海外の1☆で完走なんてすごい!」、その通りですし、  
そのように思いこむでしょうし、何も知らない周囲の方もそのように見るでしょう。

エンデュランスは走行の大半が野外であり、それを見る事のできない競技です。

今回の結果には示されないいろいろな状況…START 前に起きた心配事の数々、START を懸念された選手、単騎で行けた選手にもそれを断念させ、馬の能力を発揮する事にすら応えられなかった監督の気持、理解し支えてくれたチームの面々の気持、馬への感謝の気持、これら全てがあつての完走である事、謙虚な気持ちを持ち示す事は難しくありません。

手放しで喜ぶ事なく、おごる事なく、ひとつひとつの走行、ひとつひとつの経験を忘れない事だけが、この競技を続けていく上大事な事である事を書き添えます。

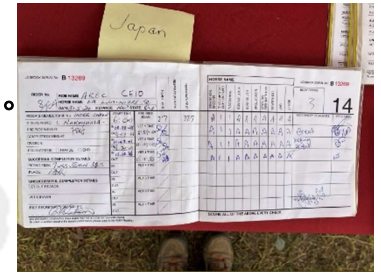




そして、現地において気づいた運営に関する事、大きく3つあります。

まずは2日目のレポートでお伝えした Logbook。

日本では北海道エンデュランス協会の所属クラブで、大会の参加と結果の記録を綴るログブックがあります。このログブック、山梨や伊豆では認知も依頼もないので記入はされませんが、北海道の大会の記録は網羅されます。オーストラリアで見た Logbook は、全ての馬が持っているのが当たり前で、どの会場でも認知されています。そしてその中身は獣医カードです、日本は会場によって獣医カードの書式も異なるのに ww。オーナーも騎乗する選手も、いつでもその馬の獣医カードの履歴を閲覧できるのは画期的です！



そして3日目のレポートでお伝えした水場の事。

FEI の公認競技でこうなら日本は何なの??と、と思った日本チームの選手🐾。

クラブ毎のバケツからしか飲めない、とか、下馬して水を汲んで馬に飲ませてバケツを洗って乗馬して、とか。会場によって運営は異なりますが日本では当たり前の光景ですね。

一方、オーストラリアでは、病気の伝搬がない事、馬の検疫も日本の比ではなく厳しい事があります。これは、人の荷物も同じ、島国であるオーストラリアは持ち込まれる靴底の土にも NG を出すお国柄ですよ。JEF の競技規則、獣医規則にも「大きな水桶から直接馬に水を飲ませてはいけない」というものがありますが、日本でも、運営が工夫をして「どのバケツから水を飲んででもいい」としている会場もあります。



エンデュランスはタイムレースですから、その本質を損なう事のないように、少しでも働きかけをしていきたいと思いました。

最後に、競技会で必要となる備品...ゼッケン、計時、検査レーンの罫、などは「共用の備品」でありトレーラーで保管されているそうです。そのトレーラーは今週はこの大会、来週はあっちの大会、というように移動して、違う競技会であっても同じ備品を使えるそうです。

3日目でお伝えした計時システムはすごく特別なものかと思いきや、どの競技会でも同じシステムなんですね...画期的です！

日本では会場毎に備品を保有・管理していて、「集結できたらいいのに」と思う時がありますが...難しいでしょうね ww。

オーストラリアのエンデュランスは長い長い歴史を持っていて、きちんとした組織と教育体系を備えています。

機会があれば一度ご覧になってみてください。 <https://www.aera.asn.au/>

4回に渡りお伝えしてきました「AREC 参戦記」、お読みいただきありがとうございました。

文責：日本エンデュランスライド協会 杉山

